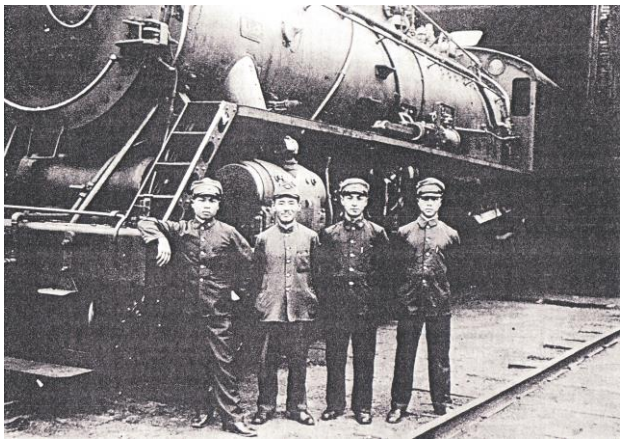
月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１３９号　2020（令和２）年 11 月 24 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/



満鉄の機関区での貝塚武雄氏（左端）。
後方は、ミカイ型貨物用蒸気機関車

私の履歴書１

定 13 回貝塚勇さんは、1944（昭和 19）年、中国のハルビン（哈爾濱）でお生まれになりました。その後、ご尊父の転勤により中国各地を転々とし、1953（昭和 28）年に帰国されました。今号では、ご誕生からご帰国までの、中国大陸での日々を伺いました。

【　　】内は筆者による注記です。

父武雄、満州へ渡る

父貝塚武雄は、1914（大正３）年、佐賀村（現かすみがうら市）坂の農家に生まれました。佐賀尋常高等小学校高等科を卒業後、満州開拓団に応募しました。満州（現中国東北部）への移民は、満州国が建国された1932（昭和７）年から、関東軍の主導の下に始まり、「３年頑張れば、３町歩の農地が無償で提供される。」との甘い言葉に釣られて、貧乏百姓の次男坊は、２ヶ月間の内地訓練の後、満州に渡りました。満州国の現地訓練所では、農業訓練に加えて軍事訓練も行われ、訓練が終わると、開拓村に入植しました。開拓団は独身男性だけの集団で約500人。全員が小銃や手榴弾を携行し、機関銃も何挺か装備していて、武装移民とも呼ばれました。

満鉄機関士

父は、農業が肌に合わなかったのか或いは満州の大平原を疾駆する特急「あじあ号」（注１）に憧れを抱いたのか、満鉄（南満州鉄道株式会社）の社員募集に応募し合格、入社。釜焚きの見習いから始まり、機関助手を経て、機関士となり、特急「あじあ号」の運転もするようになります。

1941（昭和16）年、一時内地に戻り、母貞子と土浦町川口川沿いの土浦館【現在のモール505附近にあった。】で結婚式を挙げ、６月13日に入籍を済ませました。当時、母は18歳。麻生町（現行方市）古宿の農家（半農半漁）の三女でしたが、父とは結婚式まで顔を合わせたことがなく、親同士が決めた結婚でした。しかし、母の姉も結婚して外地に行っていたので、外地行きには抵抗感はなかったようです。

２人の新婚生活は、満鉄の社宅で始まりました。日本で人気№1の会社のものだけあって、ペチカ・水洗トイレ付きで、マイナス40℃の冬でも半袖シャツ１枚でいられます【満鉄は、最盛期には日本の国家予算の半分規模の資本金と80余りの関連企業とを持つ一大コンツェルンを形成し、その鉄道総延長は１万キロ。社員40万人を擁していた。】。

1944（昭和19）年、ハルビンで長男の私が生まれました。ハルビンは、全くの荒野に帝政ロシアが創ったエキゾチックな町で、松花江の舟運と鉄道とが交差する、交通・輸送の要衝となり、ロシア革命後には、白系ロシア人たちが数多く入って来ました。料理好きな母は、ロシア人・中国人を自宅に招き、和食で持て成したり、味噌・醤油を造って上げたりしていました。そのお返しに、とロシアケーキや餃子、天津包子（パオズ）（注２）の作り方を教えてもらいました。母にとっては外国の人たちとの交流は日常茶飯事でした。そのお蔭で、私たち子どもは、美味しい食事に恵まれて育ちました。

敗戦後、父は、中華民国東北鉄道公司に雇用され【満鉄は、鉱工業をはじめとする多くの産業部門に進出し、日本の植民地支配機構の一翼を担っていたが、1945（昭和20）年２月のヤルタ協定によって、連合国の接収が決まり、戦後は、中華民国とソビエト連邦との共同経営となった。】、引き揚げ者や食糧輸送の列車に乗務する傍ら、現地人機関士の教育・指導にも当たっていたようです。そのため、一家は各地の機関区を転々とすることになります。

1947（昭和22）年には、次男忠が松花江下流のチャムス【佳木斯。周辺には、弥栄村をはじめとする、日本人最初の開拓村が作られていた。】で生まれましたが、７ヶ月で病死。雪の降る12月、遺体を橇に乗せ、火葬場へ向かいました。本当に寂しい野辺送りでした。1950（昭和25）年には、牡丹江市で三男博が誕生しました。牡丹江市は、牡丹江の畔に開かれた町で、美しい火山湖である鏡泊湖をはじめとする、見所がいっぱいの所でした。

その後、当時は黒竜江省の省都であったチチハル（斉斉哈爾。冬の寒さは特段に厳しく、屋外に保存しておいたキャベツをハンマーで割っていた。）、新京（長春）【広大な荒野に建設された近代都市。満州国建国と同時に首都となり、名称も「長春」から「新京」へと改められた。】、奉天【清朝発祥の地として知られる。満州事変はこの地で始まった。】と移り、更に万里の長城を越えて、中国本土に入り、北京、天津、漢口へと転勤が続きました。

漢口は、長江と漢水の合流点に築かれた町で、武昌、漢陽とともに武漢三鎮と総称されてきました。現在、３市は合併して武漢市を構成し、1200万人の大都市となっています。新型コロナウイルス騒ぎでは世界中の耳目を集めました。

1951（昭和26）年、私は、この漢口で日本人学校に入学し、小学１年生になりました。町の診療所のお医者さんなど、かなりの日本人が残っていて、日本人学校も存続していたのです。母からは、「内地の子には負けないように、勉強に励みなさい。」と何かに付けて、諭されました。社宅が長江の近くでしたので、学校から帰ると、よく長江を眺めに行きました。長江は、中流部とは言え、海のようで対岸も見えません。大陸の広さを実感しました。

特殊業務であった機関士は、貴重な人材だったのでしょう。待遇もよく、敗戦国民としての惨めな思いはしないで済みました。父には、中国の人たちの役に立ちたい、との思いもあったのか、帰国を急ぐ様子はありません。

引き揚げ

内地の親たちから、「早く帰ってくるように。」との求めが再三あり、1952（昭和27）年頃、両親は帰国を決意したようです。1953（昭和28）年、引き揚げ者の一団は、列車で上海に到着しましたが、そこで家財道具一切を没収され、敗戦国民としての悲哀を味わいました。しかし、満州からの引き揚げ者のような逃避行もなく、残留孤児にもならないで済んだのは、幸いであったと思います。

一家は文字どおりの着の身着のままで、引き揚げ船「興安丸」に上海から乗船し、4日間の航海の後、舞鶴港に着きました。父方・母方、双方の伯父・叔母が迎えに来ていました。一家が舞鶴で途方に暮れては、と心配して迎えに来てくれたのでしょう。方面別に引き揚げ者専用列車が仕立てられ、それぞれの故郷に向かいました。列車は迎えの者も加えて、超満員でしたが、車内のそこかしこでドンチャン騒ぎが繰り広げられました。帰国できた喜びを抑えきれなかったのです。佐賀村、麻生町でも親戚・縁者が集まっての帰国祝いが、3日3晩、続けられました。

帰国当初、一家は麻生町に借家していましたが、暫くして、土浦市中村町大房にあった、航空廠徴用工員用第6宿舎（通称で「第6」と呼ばれていた。徴用工員用宿舎は、航空敞近辺に第1から第9まであり、終戦後は、海外からの引き揚げ者や内地で戦災に遭った人々のための寮になっていた。）に移りました。宿舎は2階建てで、1棟に約20世帯が入っていました。マーケットと風呂屋が2ヶ所ずつあり、商店街も賑わっていました。

帰国した1953（昭和28）年に長女恵美子が、翌年に四男誠（人気商品はいつも昼前には売り切れとなるパン屋「コパン」を土浦市霞ヶ岡町に営んで20年になる。）が生まれましたが、父は働き先を見つけるのに苦労していました。終戦後、満鉄社員は、国鉄（現ＪＲ）に優先的に就職できましたが、引き揚げが遅かったためか、国鉄には入れず、ボイラーマンとして、川崎の三菱重工に採用され、単身赴任となりました。4人の子供を抱え（その後、三男博は、求められて、父の知人の養子に入った。）、生活は楽ではなく、母も本町にあった霞百貨店（後の京成百貨店）、京成百貨店閉店後にはスーパーに勤め、料理の腕を活かして、総菜作りに励んでいました。昭和60年代（1985～1988年）の、スナックや居酒屋が盛んであった頃、母の作った総菜は、肴としても大人気で、店主たちが大量に買い付けるので、1日の売り上げが20万円を超えることも度々でした。

母と子どもたち（左から長男勇、長女恵美子、三男博、四男誠、母貞子（1956（昭和31）年頃））

母の死

母は、2013（平成25）年3月22日午後9時10分、眠るように息を引き取りました。享年92歳。料理上手な母は、いつも美味しい食事を作ってくれました。おふくろの味で育った私たちは、本当に感謝しています。母の料理は天下一品でした。

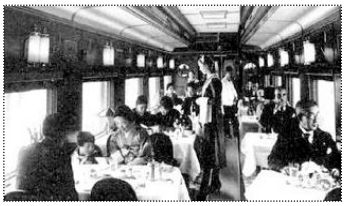
大陸への思い

特急「あじあ号」、ハルビンの喫茶店ヴィクトリアのロシアケーキ、ハルビンヤマトホテルでのディナー、水餃子、天津包子、寒い冬の日に白い息を撒き散らしながら走る馬車、広々とした松花江の向こう岸に沈む夕日、大連の星ヶ浦での海水浴などなど、少年の日の思い出は、形や色だけでなく、匂いや味、皮膚に当たる寒さや耳に残る音までを含めて、限りなく胸に浮かんできます。しかし、それに交じって、黒々としたシミのような重苦しい思い出が、脳裡を過(よぎ)るのを認めない訳にはいきません。それは、当時、低賃金で日本人に酷使されていた現地人の悲惨な暮らしぶりであり、それを当然のように思っていた私たち少年の姿です。満州育ちの人間には誰にでも、心のどこかに原罪意識のようなものがあり、引き揚げという苦しい思い出も共有しているので、単なる同郷人以上に強い絆で結ばれていると感じています。

終戦までは、日本人は、現地人に対しては圧倒的に優位な立場にありました。しかし、父は、今思えば、素晴らしいヒューマニストであったと思います。満州人社員や苦力（クーリー）と呼ばれる下層労働者に対しても、優しく親切であったようです。また、私ら子どもたちは、中国人や満州人、朝鮮人の子どもたちとも遊びましたが、みんな対等で公平な立場で行動していたことを覚えています。大人の世界はいざ知らず、子供同士には、戦争も国境もなかったのです。

満州の夜明けは早く、地平線が朱くなる頃、2頭立ての馬車の蹄の音が聞こえてきます。朝食の仕度をしながら、母がよく歌っていた「花摘む野辺に日は落ちて……」【『誰か故郷を思わざる』作詞：西條八十、作曲：古賀政男、歌：霧島昇】、「山の寂しい湖に……」【『湖畔の宿』作詞：佐藤惣之助、作曲：服部良一、歌：高峰三枝子】などなど、幼少の頃耳にした歌声は、今でもメロディーが浮かんできます。

（注1）「あじあ号」　満鉄が1934（昭和9）年から1943（昭和18）年まで大連～ハルビンの約950kmを連京線・京濱線経由で運行していた特急列車。最高速度130km/h、大連～新京701kmを8時間30分で結び、表定速度は83.5km/hに達した。これは、当時の日本の鉄道省では最速の特急列車だった。列車は、流線型の外被を付けて空気抵抗を少なくした大出力蒸気機関車「パシナ型」と専用固定編成の豪華客車とで構成される。その殆ど全てが日本の技術によって設計・製作されていて、当時の日本の鉄道技術の水準の高さを示すものとなっていた。終戦後、満鉄が保有していた鉄道は、中華人民共和国成立後の1952年、中国に返還され、現在は中国長春鉄路と呼ばれている。



特急あじあ号

（注2）包子（パオズ）　中国の点心の一種。小麦粉の生地を蒸して作る伝統的食品で、通常、中に具を包んでいるものを「包子」といい、具のないものを「饅頭（マントウ）」と称して区別する。日本では、包子を「中華まん」と呼んでいる。天津包子は、中国天津で生まれた包子で、清朝の西太后の好物であったことでも有名である。

（高21回　松井泰寿）